書　評

山村順次　著：

『観光地域論――地域形成と環境保全――』

古今書院　1990年7月

A5判　335ページ　5,500円

観光地理学の存在意義はここにあり，ともいうべき著者の気迫が伝わってくる書物である。

本書は，観光地域の特質を明らかにするとともに，観光地域がもつ問題点の改善を意図して書かれたものである。本書の特色は，副題に端的に示されているように，

①観光地域の形成過程を実証的に説述する

②よりよい観光地域へと導くための具体的提言を含む

という2つの点に力点がおかれていることである。すなわち，観光地域を対象とした歴史地理学的アプローチと応用地理学的アプローチが，本書の二大特色であるということができよう。

内容構成は，序章として観光地域研究の意義や動向を述べたあと，総論（観光地域の発達過程や機能，環境保全等を論述）としての第Ⅰ部と，各論（観光地域の地誌）としての第Ⅱ部に分かれ，最後は「よりよい観光地域形成のために」（終章）で結びとなる。以下，その概要を略述したい。

序章では，観光の概念を検討し，ついで，個別観光地の複合体としての観光地域を研究対象とする必要性が述べられる。さらに，観光地理学に関する内外の研究動向を検討し，①総合的かつ詳細な実証的研究の必要性，②具体的事例の積み重ねの上にたつ，一般化を目指した観光地域論の必要性，③指針となるべき方向性を示すことの必要性，などを指摘している。

第Ⅰ部第1章は「観光地域の発達過程」。古代から今日（安定成長期）にかけて，日本の観光現象・観光地の変遷が述べられる。とくに近世期以降の温泉利用（湯治）について詳述されており，日本における観光の変遷を考えるうえでの温泉の重要性が理解できる。外国（ヨーロッパ諸国，米国，インドネシア，韓国，タヒチ等）に関する論述もあり，温泉利用の文化的相異とともに，国際観光への視点の重要性についても理解が進む。

第2章「観光地域の形態と機能」。ここでは，観光地域のタイプを温泉，山岳・高原，海岸，宗教・史跡，および都市観光地域の5種に分類し，具体例を豊富に示して，それぞれの特性が述べられる。この分類は，のちの第Ⅱ部（地誌）においても用いられている。続いて，観光資源，観光流動や観光産業の特性が論じられる。

第3章「観光地域の開発と環境保全」と第4章「観光政策と観光地域計画」では，観光地が今日抱えている問題とこれからの進むべき方向について，著者の意見・提言が満ちている。その根本は，①環境との調和（環境保全），②地域住民の生活を重視（精神面を含めて），③野外教育の場となる「教養観光」（p. 199）の推進，とまとめることができよう。ほかにも著者の提言が多数存在するが，抽象的な理論の強引な適用は一例もなく，すべて具体的事例から導かれた内容であり，説得力がある。

続く第Ⅱ部は，第5章～第8章から成る。前出の観光地のタイプごとに代表的な事例が選ばれ，地誌としてまとめられている。事例はつぎのとおりである。

第5章「温泉観光地域」：四万，下呂，モンテカティーニ（イタリア）

第6章「山岳・高原観光地域」：志賀高原，山中湖，ウィスラー（カナダ）

第7章「海岸観光地域」：湘南・三浦海岸，紀伊長島，カンクン（メキシコ）

第8章「都市観光地域」：高山，東京，シアトル（米国）

各地域の記述には本書全体を貫く特色が鮮明に表われており，現状の説明に留まることなく，当該観光地域の形成過程が詳述されている。そして，その形成過程を踏まえたうえでの展望や提言につながっている。また，これらの事例には，今後，他地域が学ぶべきことがらが随所に含まれており，抽象的提言を超えた具体的前例集にもなっている点が特筆される。地理学の応用を企図した著者の工夫を，ここからも読みとってよいであろう。終章「結び――よりよい観光地域形成のために」も，同様の観点からまとめられている。

本書を通読して地理学の社会的貢献のあり方に刺激を受けるのは，評者だけではないと思う。それと

ともに，このようなかたちでの社会的貢献を可能にするのは，形成史を踏まえた実証研究の積み重ねであることを再認識させられる。今日のリゾートブームのなかで，時として，形成史はもとより現状把握すら不十分な論述や提言もみられるだけに，本書の価値は大きい。本文中で，著者は現今の清里（山梨県）を批判して「急ごしらえの町並」(p. 197) と表現しているが，評者にはその言葉と巷間のリゾート論評とがオーバーラップして聞こえる。本書を「時宜を得た」と形容することもできようが，むしろ，時宜が到来する以前から着実な研究を積み重ねた著者の着眼と持続力に学びたい。

なお，観光地域の形成を考えるうえで，評者が本書により新たな関心を喚起されたことがある。それは，本書でいう「観光資源」と深く関わる問題である。

著者は，「観光資源を個々の山岳，渓谷，社寺などに分類して，その規模や文化財としての価値から評価しても，観光資源性を正確に把握したことにはならない。木々の芽吹きの頃の新緑，盛夏の濃い緑や秋の紅葉，そして雪景色など四季折々に変化する森林や植生の変化と山体とが一体化した景色を我々は評価するのである」(p. 113) との例を引きながら，観光資源の把握には人間の感性にも注目する必要があることを指摘している。評者も同感である。観光行動は，対象物に対する人間の側の価値づけによって惹き起こされる。そこに山があるから訪れるのではなく，人間が，その山に訪れるべき価値を見出したからこそ，その山を訪れるのである。したがって，観光行動を理解するためには，その根底にある価値観の問題を考察することなしに進めることは難しい。

さらに，観光現象を通時的に考察する場合には，この問題はより重要になると考えられる。著者が指摘するように，「人々の観光志向性が時代とともに変わ」る (p. 196) からである。

本書では，日本交通公社の評価基準等を用いて観光資源の評価について説明がなされている (pp. 108～115) が，これらの評価基準は時間的にも空間的にも相対的であると考えることが妥当ではないか。観光地域の発達史を追究し，あるいは異文化とされる地域間での比較を行う場合には，観光対象に対する異なる価値観の存在を想定することも必要になろうかと考える。

さいわい本書には，この問題を追究する糸口になりうる事象が豊富に登場する。例えば温泉の存在は共通しているにもかかわらず，飲泉の発達をみたイタリアと入浴利用のみの日本との相異は興味深い。今日の事象であるが，外国で盛んなキャンプが日本では多くない (p. 51)，米国のレクリエーションではスキーが低率 (p. 119)，環境破壊の例として英国で顕著な落書き (p. 172) など，やって出来なくはないが，あまり行われない行動パターンの存在は，背景にある文化・習慣・価値観の相異を示唆している。

この点の考察を著者に求めるのではなく，また，この点だけが課題であるというつもりも評者にはない。本書を踏まえてこそ生じた新たな関心を述べたものである。その意味で本書は具体的事例が豊富なだけに，新たな関心の宝庫でもあると思う。

（小口　千明）